

山と博物館

第21巻 第3号

1976年3月25日

大町山岳博物館



春の香り

撮影 西沢 要

コマクサとライチヨウ

山岳博物館のコマクサ園には、年々あのコマクサの可憐な花の数がふえて訪れる人々の目を惹き寄せ、昨年の七月朔からかえったライチヨウは人工気候室の中ですくすくと成長している。これは館員のみなさんの丹精の賜であり、日夜を分たぬ努力の成果である。

コマクサを初めて見たのは、小学校五年の夏休みで、担任の先生につれられて乗鞍岳に登った時だった。山小屋の主人がオコマクサだといった。ほかの高山植物がほとんど生えていないような石ころだらけの所に生えているのも、背丈が低く葉が繊細なもの、花の色が妙に人の心を惹くのも、強く印象に残った。教員になってから生徒を引率して燕岳から槍ヶ岳、槍ヶ岳から燕岳と何回か縦走した。昭和十五、六年ごろには、この縦走路のうち大天井岳から西岳へ向う途中の道はたにコマクサの花をたくさん見た。しかし終戦後登山者の増加につれていろいろな高山植物が荒されるときも、コマクサの姿も少なくなつて、事前指導はしたものの実物を見つけてこれがコマクサだと教えるのに苦労するしまつた。

自然保護の声が大きくなるにつれて、今では燕山荘の裏手を少し下つたあたりの岩かけや、燕山荘からすぐの登山路わきにもコマクサの可憐な花を見ることができるようになつた。

ものを言わない植物は、そこを訪れる人たちがそれを摘んだり踏み荒したりさえしなれば、またもとのように繁茂するけれど、足音におびえ、騒音に心を驚かすライチヨウは、あとからあとからと続く登山者にわくわくを追われ、落ちついて抱卵もできず、数はだいに減つて、氷河期の遺物といわれるライチヨウの危機であるといわれている。

こういう時、山岳博物館でのライチヨウ飼育の努力が、ライチヨウの保護に何らかの道を拓いてくれることを祈つてやまない。

(長野県山岳総合センター職員、野村良男)

飼育ライチヨウの一年

荒井今朝一

昭和三十八年以来当館で実施してきたライチヨウ飼育増殖事業は、数々の成果を上げながら昭和四十八年より一時中断してまいりました。その間、施設整備等を進めながら、事業の再検討をおこない、各方面とライチヨウ飼

育グループを結成し、昨年より再出発しました。その結果七月中旬、北アルプス爺ヶ岳で採卵しました六卵より六羽の雛がふ化し、うち四羽は現在も無事生存しております。ここにその概要を報告し、市民のみなさんはじめ

関係各位に感謝申し上げますとともに、今後のご指導とご支援を切にお願いいたします。

1、準備

六月下旬から七月上旬にかけて、二回、計四日間にわたる現地調査を行いました。早朝より調査を重ね四ヶ所の営巣地を発見し、七月初旬から中旬をふ化予定時期と推定しました。一方、館の関連施設、器材は、四月より整備とテストを重ね、六月には、受入れ体制

2、採卵からふ化

七月中旬、爺ヶ岳現地地で採卵しました。この時、四ヶ所の採卵予定地のうち、二ヶ所はすでに雛がふ化しており、他の二ヶ所もかなり発生が進んでいましたが、恒温槽に入れ、

もほぼ終了してまいりました。



採卵直前の卵



ふ化後14日令の雛

項目	月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
飼育回数			← 1日7回	← 1日5回	← 1日3回					→ 1日2回
飼料			← 卵黄等	*75-A	*75-B	*75-C	*75-D	*75-E	*75-F	
飼育環境			育雛器		気候室				気候室外併用	
予防・衛生				毎日、掃除、殺菌				毎日掃除・隔日殺菌		
平均体重(g)			▽	▽▲	▲▲	▲	▽		▽	▽
その他			検討会	検高野	ラウイ保護		冷工房事	検討会	死羽亡	

昭和50年度ライチヨウ飼育プログラム (E:75-A~75-Fは飼料名、▽は糞埋検査、▲はワクチン接種)



ふ化後35日令の雛

3、育 雛

ふ化直後の雛は、ただちにライチョウ育雛室に二羽、気候室に四羽、別々に収容しました。この施設の衛生関係の指導には、松本家畜保健衛生所があたり、万全を期しました。初期の餌付け、給温等も順調に進み八月初旬には、排温して、冷房のみに切替えました。この間、飼育担当者は、朝七時より夜九時まで一日七回飼育に当りました。特に、成長に

注意深く運搬したところ、無事、当館のふ卵舎へ収容できました。なお採卵した卵数は、二卵と四卵の計六卵でした。収容と同時に、ふ卵が開始されました。特に、温度と湿度には、注意がはられました。発生が進んでいくこともあって、翌日二羽、翌々日四羽の計六羽がふ化しました。六羽は、雄四羽と雌二羽でした。平均体重は十八gで外見的には順調と思われました。



ふ化後91日令の飼育ライチョウ

4、成鳥の飼育

九月月上旬から十月中旬にかけて、成長も安定してきました。九月下旬からは、換羽もはじまり、育雛について、いちおうの目安をつけることができました。この期には、伝染病予防が問題となり各種のワクチン接種を行いました。ところが、十一月月上旬、このワクチン接種に起因すると推定される状態で、雄二羽が死亡しました。残念な事件でしたが、各方面に検討を依頼し、現在も原因を究明中

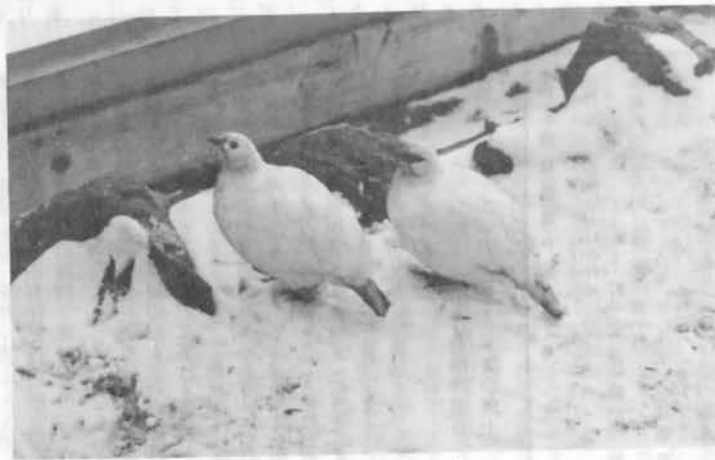
合させた餌の切替、温度プログラム、定期健康診断等については、十分検討されましたが、今後改良を要する点もかなりあると思われる。六月頃には二世雛生が期待されるので、現在、私達はその問題の検討を進めております。なお現在の健康については、ほとんど問題は無いように思われます。

（山博学芸員補）

その後、十一月月上旬よりは、完成した新飼育舎、屋外舎を使用しながら、冬期間の低地気候による飼育を試みました。この期には、残った雌雄各四羽をニツガイとしました。このニツガイは順調に成長し、十二月初旬には、ほとんど換羽して、純白の冬姿にかわりました。

5、近 況

近年になく残雪が少なく、三月に入るやだちに周辺の整備を開始しました。ニツガイの成鳥は再び夏姿への換羽を開始しました。特に雄は、純赤な肉冠を聞いて時々威嚇します。更に換羽が進み、四月に入ると繁殖期となります。今春の



ふ化後 182日令の飼育ライチョウ

昭和50年度ライチョウ保護増殖事業参加者

所 属	職 名	氏 名	担 当
山 岳 博 物 館	館 長	平 林 国 男	総括・企画・渉外
	主 事	橋 沢 敏 水	庶務・経理
	学芸員補	荒 井 今朝一	庶務・施設管理 飼育管理、調査 実務、研究
東 京 農 業 大 学	学 生	宮 野 典 夫	飼育実務、調査、研究
大 町 市	厚生事業センター所長	海 川 庄 一	飼育研究
松 本 家 畜 保 健 衛 生 所	所 長	森 山 行 雄	〃
	主任	青 木 守 郎	〃
	技 師	望 月 義 明	〃
	技 師	田 中 けい子	〃
東 京 農 業 大 学	学 生	上 杉 和 穂	調査研究
山 岳 博 物 館	学 芸 員	千 葉 彬 司	事業協力
	職 員	帯 刀 千 仁	〃
	臨 時 員	望 月 代 至 枝	〃
	臨 時 員	奥 原 由 美 子	〃
大 町 高 等 学 校	学 生	福 島 佐 智 夫	代替飼育
	学 生	石 丸 茂 雄	〃

信濃冠詞ミスズ考

(1)

室 井 綽

水蘆、三蘆はミスズである。
万葉集に次の歌がみられる。

九六 水蘆刈信濃乃 真吾引者 宇真人
佐備而 不欲將言可聞 (卷二)

九七 三蘆刈信濃乃 真吾不引為而 弦作
留行事乎 知跡言莫君仁 (卷二)

二七〇三 真蘆刈大野河原之 水蘆 恋来
之妹之 紐解吾者 (卷一一)

右の歌にある信濃の冠詞「水蘆、三蘆」について国学者達の考えは諸説に分れているが、古今の万葉学者の大多数が「ミスズカル」に賛意を表していることはご承知の通りである。すなわち、今ここに著名な著書拾って分類してみると、次のように三説にわかれる。

ミコモカル説 全訳本、元暦本、類聚古集、古葉略類聚鈔 紀州本、住詞、代匠記、冠辞統習、古義、松岡古語辞典、赤松氏創見、定本、沢瀉氏校註。

ミクスカル説 紀州本左米筆、西本願寺本以下寛永本に至る諸本。仙覚抄、宗祇抄、菅見、拾穂抄、総釈。

ミスズカル説 童蒙抄、考、略解、松燺手攷証、新考、註疏、美夫君志、井上氏新考、折口氏口訳、橋田氏傑作選、新訓、総索引、全釈、講義、次田氏改修、本新講、菊地氏精考、金子氏評釈。

しかし、右の表示でもわかるように、古典がミコモであって、新典がミクスである。童蒙抄以後はミスズ説が広く用いられている。現在においてはミスズ説が絶対優勢であることは明かなことである。

しかし、そのミスズが何を意味するか、ミスズの実体は何であるかという点になるとまだ定説がないようである。少くとも次の諸説にわかれて決定を見ていない。すなわち、マコモと見る説と、笹とする説とがある。また、

笹とするものにも、一つはスズダケとみなし、一つはネマガリダケと、または何の種類と決定していない説との三つがある。以下各種の植物について、実地踏査を基として座右にある書物を繕いて考証してみよう。

ミスズはマコモではない
古文獻にあらわれたマコモであるとする説について考証してみよう。

上田秋成の「冠辞考統習」の解釈をみると、みこもかる 信濃

これは万葉集に水蘆刈信濃と書て、水草の刈る時にしなへなびくをいい、誰も説ききたりていぶかしきことあらぬを、しいて蘆は蘆の誤字とし蘆はしぬ竹なれば、みすずかるしなぬとよみ改められしは、過なりというべし。

同集に真蘆かる大野河原と水ごもりにとよめるを思へば、水蘆、真蘆同物にてこそあれ、これらをまで改めんこと、秋の花々しきものなりと解釈している。

近くでは、沢瀉氏が「万葉集定本」に、あるいは「国語と国文」に、また「万葉古経」二で、コモ説を主張された。それは、かつて信州人であった土屋文明氏の誤説に、沢瀉氏の意識が働らき過ぎているものとみて差支えないものと思われる。すなわち、土屋氏の意見は「万葉古経」によると、

蘆は草であるから書紀でも蘆は草の意に用いているので根曲竹を意味するスズに出たのではない。その方が字の本義なのである。いわゆる蘆を実用的に産するのには信州でも北部のみである。その意味でミ蘆カ

ル信濃と訓んでもそれは決して信濃に打つてつけの枕詞でも何でもない。しかしこの枕詞は真淵の改訓してミスズカルと唱え出

して以来、一般に用いられて、長野県に美蘆という村名まで生ずるにいたった。又ミコモカルと訓す説もある。みこもかる大野などの例に従えば、これも一理ある。コモは草の別名である。

と綴っている。更に沢瀉氏の名文を借りると、信濃の国は北越の大河信濃河の上流、千曲川がその東部を流れ、その支流が西部を流れ、諏訪湖、木崎湖などの湖沼にも富んであり、……都人士にも山の国であるも富んで川の国でもあると認められていたと考えてよいものではなからうか。

と結び、続いて右の文を価値づけるために、卷末付記として、

信濃の地は本文中にも述べた様に、河川沼湖に富み、菰が至るところに見られることはその後同地の人々からの承認を得たので「白菅の真野」などと同じく今はやはり同地の産地を地名に冠せたと見る第一案によるべきかと思つてゐる。

と稿を終つてゐる。しかしこれでは必然性に欠けている。同氏の説によると、千曲川、信濃川や木崎湖にマコモが岸邊を縫つて生えていて、葉々相摩するように受けとれるが、マコモは水辺の草には相違はないがこんな処には殆んど生えるものではない。すなわち、泥水の停滞する池沼に限られているのである。

つまり、沢瀉氏が植物、殊にマコモの生態について全くご存知ないから、こんな臆面もないことが公表できたものである。要はもつともつと広い植物学の知識をもつて、実地に旅

もし、検証して貰いたいものである。マコモが我が国の水辺にごく普通に自生しているの

であるから、信州一面に生えたとしても、信濃の冠詞にせねばならぬほどの親しきは、あの夏季の涼しい高原の山国では当然想像もできないことである。また仮りに、大群落がみられたにしても、こんな瑣事が、この広大な

国名になるなどとはどうしても考えることができないではないか。

また、馬淵の「冠辞攷」の卷二一に

真蘆刈大野河原之水ごもりとよめる蘆は菰のことにて川原のさまをいひたり、今と思ひまどうことなけれ。

と述べているが、この句は馬淵のいうように信濃とは関係なく、下の句からしてマコモを指していること考定し疑いの余地のないものと思われる。すなわち、右の句の「真蘆」がマコモである事実がいくら明かになつても「水蘆刈」の水蘆がマコモの意味で信濃の枕詞となつたという証明にはならないのである。

また、「古義」の信濃を隠沼とするのは、雅澄の一家言に過ぎないことは山田氏によって、既に指摘されている所である。

ある万葉学者によれば、ミスズという語は語としてあり得ないということから、マコモなりと主張するが、このことについて語源学者として、あるいは、植物学者として第一人者であつた理学博士松村任三氏の説を借りることにする。(信濃博物学雑誌、第三八号、明治四〇年発行)

……余は漢字を論ずるにあらず、音を論ずるを主とす、凡そ原語の起るや、音の口により発するが先にて、文字はその符として後に製造したるなり…… 愚按ずるにマ

とよい、ミという言は数多くありて皆真の義あるに非ず「ミスズ」てふ言のミは苜の福州音 *mu* より出で *Quarantani* の義なり、又或は福州音 *mi* も通ず *florishing* *karantani* の義なればなり、繁茂するスズ竹というがこの水蘆なり、真のスズ竹ということあるべからず……

(富士竹類植物園長 農学博士)

山と博物館第21巻第3号
 発行所 長野県大町市TEL山〇二二一
 印刷所 大町市下仲町山岳博物館
 定価 年額 八〇〇円(送料共) 切手不可
 郵便振替口座番号(長野)三二、二九三